

動作の主体を主語とする難易文について

On Tough Sentences with the Agent of the Action as the Subject

孫 慧 鑫

SUN HUIXIN

動作の主体を主語とする難易文について

孫 慧 鑫*

1. はじめに

動詞との意味関係において何が主語になるかという観点からみて、日本語の難易文には、動作の主体を指し示す名詞が主語となるもの（例1、2）と主体以外を指し示す名詞が主語となるもの（例3）がある¹。

- (1) まだ胃の中にたくさんの食べ物が残っていて、（私は）息がしにくい。
- (2) 彼は脳性まひで、生まれつき両足と左手が動かしにくい。
- (3) 小骨の多い魚は食べにくい。

本稿では、特に例1、2のような動作主体を主語とする難易文を対象とし、このタイプの文の意味とその成立条件を記述することを目的とする²。記述にあたっては、可能文の研究がそうしているように、難易を条件づける要因に従って、全体的な分類を行う。すなわち、「内的要因」が難易を条件づけているものと「外的要因」が難易を条件づけているものに大きく分ける。そして、記述を行いながら、①動詞によって表される動作の性質が難易文の意味にどのように関与するか、②「しやすい」を述語とする難易文と「しにくい」を述語とする難易文との非対称性、③意志的な動作の難易を表さない文の特徴、という3つの観点を導入し、考察する。

以下の記述に使用するのには、筆者が小説類から手作業で収集した用例のほか、現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）や朝日新聞記事データベースによって収集した用例である。

2. 内的要因の場合

動作の実現の難易を条件づける「内的な要因」とは、動作主体の身体機能や体調、性格や心理状態などである。恒常的なものや長期的なものもあれば、偶発的で一時的なものもある。

* 岡山大学大学院社会文化科学研究科博士後期課程

¹ 「はじめに」では、説明をわかりやすくするために、実例をもとにアレンジした作例を用いる。

² 実際の用例は、動作の対象を主語にするものの方が多く、難易文としてはより中心的である（孫（2023、2024）を参照）。可能文にも「この水は飲める」のように対象を主語にするものはあるが、周辺的である。

2.1 身体機能

まず、主体の身体的機能を要因とする難易文を取り上げる。以下の用例は、病気や老化による身体機能の低下を要因として、動作の実現が困難であることを表している。

- (4) 高齢になると、そしゃく力が弱まり、だ液の量も減り、飲み込みにくくなる。誤って飲食物を気管や肺に入れる（誤えんする）と、肺炎の原因になる。（朝日新聞 朝刊 1999.10.19）
- (5) 一般に高齢になると、視力が低下して遠くが見にくくなり、近くは老眼でボケる。（隠居のススメ）
- (6) 「水木さん、苦勞して書かれたんだと思います。右手が動かしにくいから、字を書くのはたいへんなはずです」
「だから何だよ」（その扉をたたく音）
- (7) スタッフの山田哲功さん（37）は、（略）幼いころの事故で障害がある。傾いた姿勢になり、歩きにくい。（朝日新聞 朝刊 2007.11.10）

これらの文は、主体の恒常的な特性を表す点で、「彼女はやさしい」「彼は背が高い」のような特性形容詞文と似ている。性格や身体的特徴と同様に、その動作をするときに困難さをとまなうということもまた、その人の特性と理解されるということである。特性は恒常的であるから、一般主体の場合でも個別主体の場合でも、このタイプの難易文の動詞は基本的には非過去形をとる³。

なお、これらの難易文に用いられる動詞によって表される動作は、身体に異常がなければ問題なく実現できるものである。異常がなければ、動作の難易はそもそも問題にならないだろう。病気や高齢になり身体機能が低下して初めて、動作の困難さが現れるのである。よって、このタイプの難易文には「しやすい」を述語とするものではなく、「しにくい」しか現れない。

2.2 体調

次に、主体の体調を要因とするものを取り上げる。次にあげる用例は、時間の中にリアルに現象する一時的な体調の異変によって、その場での動作の実現が困難な状態にあることを表す。

- (8) 「実はね、私も午後から妙に身体が重い。頭が痛むし」
「肩も凝ります？」
「肩も凝るし、息がしにくくて、胸がふさがれるみたい」（朝日新聞 夕刊 2005.11.10）

³ ただ、個別主体の場合、「彼は生まれつき左手が動かしにくかった」のように過去形をとることが可能である。この場合の過去形は「主体の非現存」を表す。特性形容詞の場合と同様である。

- (9) 蓉は何もきかずに、「どうぞ」と彼を迎え入れた。まだ胃の中にたくさんの種類のチヂミとナムルが残っていて、息がしにくい。(オルタネート)

上の2つの例は、その場での動作の実行に伴う困難さを感覚として捉えている点では、感覚形容詞文と同じである。また、基本的に、経験者である一人称が言語化されないという点も、感覚形容詞文と共通である。

身体機能の場合と違い、時間の中に起こるレアルな現象を表すので、当然、過去形の例もある。次は、過去において動作の実行に伴う困難さを動作主体が感じたことを表す⁴。

- (10) 車中泊4日目の13日。目が覚めると、全身が痛くてシートから体を起こせない。せきも止まらず、気管に物が詰まったかのように、息がしにくくなった。(朝日新聞 朝刊 2021.4.30)
- (11) 口のなかの粘膜まで腫れてきていて、しゃべりにくかったがわざと明るい声を出した。(きみはポラリス)

体調を要因とする場合も、用例のほとんどは「しにくい」を述語とするものであるが、「しやすい」を述語とするものも一例あった。例12は、病気である話し手が今日は体調がよいから息がしやすいと感じているというものである⁵。つまり、普段は息がしにくいという特殊な前提があって、「しやすい」が使用されていると考えられる。

- (12) 午後九時、洗い物をしていると、母が台所に現れた。

「今日は、息がしやすいわ」

しばらくぶりに母の顔を見たような気がした。

「よかった。お母さん、ごはん食べるよね？」(ヴァイタル・サイン)

次のような、一定の幅のある期間において、動作の実現が困難な状態が繰り返し実現していることを表す例もある。過去のことであることに変わりはなく、具体性を失ってはいない。

- (13) ここ数カ月、朝起きると両手がパンパンにむくんで指も曲げにくかった。持病もあるし、更年期だし、体がどこか悪いのかと思っていた。(朝日新聞 朝刊 2008.7.8)

⁴ 例10のように「しにくくなる」という用例が見られるのも、時間の中に起こっている現象を捉えるからである。「なる」と組み合わせるのは状態形容詞も同じである(「悲しくなる」「痛くなる」)。なお、未来の例も推量ならありうるが、実際にはそのような用例は見当たらなかった。

⁵ ただし、文脈情報が不十分であるため、ここでは、要因としては主体の体調のほか、天候なども考えられる。

2.3 心理状態

次は、主体の心理的な側面が動作の実現の難易の要因となっている例を取り上げる。次の用例は、動作主体には実行したいという欲求がありながら、心理的抵抗を感じていて、その動作をなかなか実行に移せない状態にあることを表している。

- (14) 「見せてよ、どんな風に分析されるのか興味ある」

自分の遺伝子解析の結果を見せるのはちょっと照れくさいけれど、笹川先生も秘密を見せてくれたから断りにくい。風津は躊躇しつつも結果をスマホに表示し、笹川先生に渡した。（オルタネート）

- (15) 梅雨明けとともに本気を出しはじめた太陽とセミたちが、マンションの外に出た僕たちをとっておきの暑苦しさで歓迎してくれた。

これなら日が暮れるまで部屋でくすぐりっこを続けているんだってと後悔したが、日焼け止めクリームとチューリップハットで紫外線対策を完璧に整えたばかりの真緒には言いだしにくい。（陽だまりの彼女）

- (16) 電車内で老人に席を譲る不良を目撃すると、あたりまえの行為をしているだけにもかかわらず、その不良がとてもいいひとのように感じられる。それと同じで、多田はなんだかほだされてしまった。めずらしくがんばって働く行天に、隠しごとをしているのがうしろめたい。かといって、はるを預かるなどと言ったら、行天がどんなにいやがるだろうと思えば、ますます話を切りだしにくい。

結局なにも言えないまま、行天に煙草を一箱おごってやった。（まほろ駅前狂騒曲）

- (17) 昨夜、こころの話を聞いたお母さんは、怒ったり取り乱したりしなかった。（略）

恋愛絡みのことなんか、話しにくかったけど、頑張って話した。

話を聞き終えたお母さんに、感情的になって、怒ってほしかったからだ。（かがみの孤城 上）

動作の実行が困難な状態にあるとはいえ、実現する可能性がなくなっているわけではない。実行したい欲求が心理的な抵抗感に勝れば実行に移すだろうし、逆にその心理的抵抗を克服できなければ、動作は実現しないままに終わるだろう。点線の下線部を見ればわかるように、例14、16は、非実現の場合であり、例17は実現の場合である⁶。心理状態が要因となる困難さも一時的な現象であるので、過去形の例もある。未来の例はなかった。

心理状態が要因となる例でも、「しにくい」が多いが、次のような「しやすい」の例も2例見られた。

⁶ 例15については、広い文脈を見れば、その動作は結局実現しないままに終わったことがわかる。

- (18) 四日前の夜の十時すぎ、思いきってかけた電話のむこうで、加賀美は相手が佐代子だと知っても、べつだんいぶかるふうもなく、驚きもせずに淡々と対応した。これまで佐代子がじかに彼に電話をしたことは、ほとんどなかったにもかかわらず、である。おかげで佐代子も切りだしやすかった。（やさしい関係）
- (19) 私はこの言葉を忠実に守っているつもりであった。しかし、社長にはすべてお見通しのようであった。社長から、何か用事が？といわれると、私としては切り出しやすかった。（炎の声土の声）

例18、19は、元々何らかの憂慮や心配が存在していた状況にあって、何かのきっかけでそうした抵抗感が軽減・消失したため、動作の実現が容易だったということを表すものである。

「しにくかった」を述語とする文は、「動作の実現が困難であった」ことを表すだけで、動作が結局実現したかどうかは文脈を見なければわからない。それに対して、「しやすかった」を述語とする文では、「動作の実現が容易であった」ということに止まらず、実際に実現したということが含意される。心理状態を要因とするタイプでは、こうしたレアリティーの点での非対称性が見られることが注目される。

なお、心理状態が要因になる場合では、少数ではあるが、「しにくい」には、何らかの妨げがあって動作が心地よく行えないことを表す例もある。

- (20) 東体大一年の補が、こちらに気づいたようだった。一緒に走っていたチームメイトに、なにか耳打ちする。ざわめきがすみやかに東体大の一团に広がり、特に一年生のなかには、振り返って走たちを見るものが続出した。
- 「なんだか、やりにくいですね」
- とムサが気引になる。緊張しがちなキングは、別荘に帰ったそうだ。（風が強く吹いている）
- (21) 俺は無言でチューブの穴探しを続けた。後ろに突っ立って見ている、少年の強い視線を感じてどうにもやりにくい。（男たちは北へ）

心理的な抵抗は、基本的にはその場の一時的なものであるが、次の例のように、やや長期にわたる場合もある。そうした例では、動作を実行しなかったことに対する理由を説明する文脈で使用されることが多い。当然のことながら、心理的な抵抗を表すものはすべて「しにくい」の例であり、「しやすい」の例はない。

- (22) でも、若者が少ない山村では、やっと林業の後継者志望が現れたと、研修生を受け入れて熱心に指導してくれる。逃げられない。助成金の三百万と、村人の喜びと熱意をまえにして、

「やっぱりやめます」とは人情として言いにくい。(神去なあなあ日常)

- (23)「遺伝子を取りちがえたこと、松田先生に報告は?」

と尋ねてきた。

「まだです。言いだしにくくて……」(愛なき世界)

- (24) 洋子はどうしてるかな。相変わらず、あのしけた菓子屋で店員をしているんだろうか。まさかな。あいつも二十四になるはずだ。二十五だっけ? 早いとこ、嫁に行かないとな。いい相手いるのかな。お袋がああいう性格だからな、のんびりしてやがるんだろうな。いや、洋子の方がお袋に気遣って、出ていきにくいのかももしれない。お袋のことは俺が面倒みるっていつてやらなきゃな。大丈夫さ。こんな身体だって、お袋の一人ぐらい何とかしてやる一。(魔球)

心理状態を要因とする難易文は、「うれしい」「悲しい」などを述語にする感情形容詞文と同じように、必ず1人称文である。ただし、以下のように、推量や伝聞などの内容となる場合には、2人称文や3人称文も見られる。

- (25)「すべては合併が正式に決まってから」と両球団社長は言う。確かに、大阪市、神戸市への気遣いもあるから、今は言いにくいだろう。(朝日新聞 朝刊 2004.6.22)

- (26)「ウレシノが自分を見ると気まずそうにしたりするのが、アキちゃんとしてもちょっとやりにくいみたいで」(かがみの孤城 上)

- (27)「ところで。一つ、聞きたいことがある。悪く思わないでほしいんだが」

「……なんだ。出し抜けに」

大迫はもう一度、咳払いする。結城からは微妙に視線を外し、言いにくそうだ。(インシテミル)

- (28)「あ、ごめんね。そういう答えじゃないと話がつけにくかった? やめとけ。良識をゆさぶるやり方、おれには通用しないから」(爆弾)

以上に見てきた例では、心理的な側面が動作の難易の直接の要因となっているとしても、その心理はさらに出来事や状況といった外的な条件に基づいている。したがって、動作の難易を条件づける要因は実際には複合的であると言える。例えば、例26の「やりにくい」はアキの心理的負担によるものだが、その負担はウレシノの「気まずそうな様子」やその場の人間関係といった外的条件によって生じている。このように、難易は単なる心理状態ではなく、その背景にある状況要因とも密接に結びついている。

心理状態を要因とする場合の最後として、次のような聞き手への配慮や言語化への躊躇の態度を表明する陳述成分に移行している例を挙げておく。

(29) 「そうなんです。いやあ、実は大変申し上げにくいのですが、例の件ちょっと無理のようなんです」

電話を握り締めたまま、赤松は言葉を失う。（空飛ぶタイヤ）

(30) 「とても言いにくいんだけど、もう少し、おさえられるかしら」

「何をですか」

「すごく美しいオルガンよ。だけど、そこまでじゃなくていいの。発表会ではないから。もっと普通でいいのよ」（オルタネート）

3. 外的要因の場合

前節では、動作の実現の難易が動作主体の内的な要因によって条件づけられている用例について見てきた。ある動作を遂行するための内的な条件が主体にそなわっていたとしても、その遂行を妨げるような外的状況が存在していれば、主体にとってその動作の遂行は困難である。逆に、その遂行を促したり、その助けとなったりする状況が存在していれば、主体にとってその動作の遂行は容易である。以下では、こうした状況＝外的要因が難易を条件づけている場合を取り上げる。

その条件は、条件・原因的なつきそい文（「すると、すれば、するので、するから」など）によって表されることが多いので、この場合の難易文は複文の構造をとりやすい。また、その条件は、中止形や場所を表す状況語によって表現されたり、前後の文脈の中に与えられたりすることもある。

外的要因となるのは、天候や光加減、雰囲気、物理的な抵抗、他者の関与、動作のやり方など、様々なものがあり、内的要因の場合と同じように条件ごとに記述していくことが難しい。よって、ここでは下位分類をせず、まとめて「外的状況」と呼ぶことにする。ただし、動作のやり方や手段が要因となる場合は、他と違った特徴が見られるので、分けて記述する。以下では、「外的状況」「動作のやり方・手段」の順に記述していく。

3.1 外的状況が動作の難易を条件づける場合

難易を条件づける外的状況の中には、偶発的で一時的なものもあれば、長期的なものや恒常的なものもある。このことが、動作の時間的限定性（一回的・反復的・恒常的）や主体の性格（個別主体か一般主体か）と相互に作用しつつ、難易文の意味合いの違いを作り出す。例えば、例31では、光量不足という一時的な状況が原因であり、個別主体の一回的な動作の実現の難易を表している。一方、例32では、相手の知識量という長期的な条件に基づき、「言いにくさ」が一回の発話にとどまらず、繰り返しの発話にも影響する。また、例33のように主体が一般化される場合、時間的な限定性は消失し、一般的な傾向や規則性を示す表現となる。

- (31) 「あー、もう暗くて書きにくいっ」(青い鳥)
- (32) 彼自身かなりの知識を持っているので、いい加減なことを言いにくかったが、いい加減なことしか言えなかったように思う。(遙かなるケンブリッジ—数学者のイギリス)
- (33) しかし、多くの人は、やはりそれぞれにとって心地よい環境でなければ、仕事や勉強をしにくいのではないのでしょうか。(知的生活・楽しみのヒント)

3.1.1 難易を条件づける状況が一時的なものである場合

動作主体を取り巻く、その時、その場での具体的な状況が要因となり、個別主体の一回的な動作の実現の難易を表す例がある。時間は、過去・現在・未来のいずれもある。

まず、過去形の場合からみる。次の例は、動作主体を取り巻く具体的な状況の中に動作の実行を困難にする要因が存在することによって、動作主体が動作の実行に困難さを感じたことを表している。

- (34) 私は口元に手をやり、ずっとつけていたマスクを剥ぎ取った。そこに相手の血がべったりとついて、不織布越しに呼吸がしにくかった。(レモンと殺人鬼)
- (35) 「じゃ、枕も買っていい？」
昨日は枕がないので、寝にくかったのだ。(バラカ 下)
- (36) 「この子の子宮が後屈でね、ちょっとやりにくかったんだ。それに俺、あの時、少し酔っぱらっててさ。手元が狂ったんだ」
医者は悪びれる様子也没有。(夜盗)

次にあげる「しやすかった」の例は、外的状況によって動作の実現の難易が左右される状況において、動作の実現を容易にする外的状況が存在するため、動作の実現が容易だった＝動作主体が容易さを感じたことを表している。

- (37) 伊藤選手は「天候に恵まれ、走りやすかった。実力を100%出せたベストレースになった」と笑顔で振り返った。(朝日新聞 朝刊 2021.9.12)
- (38) 雲一つない夜空に、卵色の月がやわらかく光っている。とても明るい月夜の晩だ。昼間の暑さが嘘のように影を潜め、優しい風がそよぐ。
「これなら、ここに来るまで歩きやすかっただろうね」
隣に腰かけた少年に言うと、困ったように俯く。(52ヘルツのクジラ)

現在の例もある。例39、40は、動作主体を取り巻く具体的な状況の中に動作の実行を困難にする

要因が存在するため、動作主体が動作の実行に困難さを感じていることを表している。例41は、動作の実行を困難にする要因が存在していたが、状況が変化し、その要因がなくなったため、動作主体が動作の実行を容易であると感じていることを表している。

(39) (傘をさす場面)「ちえ、もう差しにくくて仕方ない」

梅雨真っ盛りの激しい雨の降る夕方、大浦君と駅までの道を急いだ。(幸福な食卓)

(40)「あー、もう暗くて書きにくいっ」(青い鳥)

(41) 二十メートルほど進むと、通路は下り坂になった。それまで流れていた水がなくなり、歩きやすい。篠竹の燃える匂いが強くなった。(養安先生、呼ばれ！)

なお、主語をめぐっては次のような問題がある。例43は、「私」が「聞き取りにくい」のか、この「音」が「聞き取りにくい」のか、ということである。これは形容詞文に通ずる問題である。「この部屋は寒い」の「寒い」のは私か部屋かという問題である。ここでは、動作主体の経験を述べる文として捉え、動作主体が主語であると考えている。動作主体が一般化された場合の「この音は聞き取りにくい」は「音」が主語になっていると考えてよいだろう。

次にあげるのは、対象の状態によって、具体的な時間の中での動作の実行が困難になっていることを表している例である。

(42) じゃがいもをボウルに入れてマッシュするが、蒸す時間が足りなかったのかほんの少し固くて潰しにくい。焦って手が震えてしまって、うまく力が入らない。(オルタネート)

(43) しばらく、海面に浮いたままシュノーケリングをしていると、聞き慣れない間欠的な低い音に気がついた。ズーズーと低く重い音で、聞き取りにくいのが確かに聞こえている。(首都圏大震災)

用例数は、「しやすい」よりも「しにくい」が多いという印象であるが、その差は内的要因の場合ほど目立たない。

3.1.2 難易を条件づける状況が長期に存在する場合

過去あるいは現在のある期間において、難易を条件づける状況が長期的に存在するため、動作の実現が困難/容易であることを表す例がある。

まず、以下の例では、具体的な一回の動作ではなく、反復的な動作を捉えていて、何回動作をしても、その実行が容易でない(困難である)と話し手を感じていることが表されている。話し手の

実際の体験に基づいているので、抽象化の程度は低い。

- (44) 冬になって乾燥しているからじゃないですか？ 私も最近めぐりにくいです！ (Yahoo! 知恵袋)
- (45) あたしはパートに出ながらお母さんの通院や入院に付き添ってきたけど、だんだんと休みが多くなって、働きににくくてさ。 (夜明けのはざま)

次にあげる例では、現在あるいは過去の広い期間に、動作の実行が容易である（困難でない）ことが表されている。また、例48、49は、妨げを減少させるような状況の変化によって、変化後の動作の実行が容易になったことを「しやすくなった/なっている」の形で表している。これらの例は、動作の反復ではなく、より抽象的な状況を捉えている。

- (46) 響子の具合が悪いときに学校から呼び出されても、すぐに向かうことができる。何より、上司が子育てに理解があり、休みも取りやすいという。 (うつくしが丘の不幸の家)
- (47) 「復興への全責任は自分が取るという町長の言葉で組織が引っ張られていた。私たちも働きやすかった。 (略)」と連携をたたえた。(朝日新聞 朝刊 2012.2.20)
- (48) 付き合って二年にもなると、いつからか自然にお互いが苦手なものをカバーできるようになってくる。 (略) お互いがいるから、二人ともほんの少しだけ生きやすくなっている。 (強運の持ち主)
- (49) それに加えてソーニャは、れっきとした既婚女性の身分を手に入れたことで、ヨーロッパを一人で旅してまわりやすくなったのだった。 (フェルマーの最終定理)

用例の数は少ないが、未来のある時点にある出来事が起こると、動作の実行が容易／困難になることを表す例もある。未来の出来事は直接体験できないので、実行が容易／困難は話し手の判断として示される。

- (50) 「葛西候補の本学教授当選ともなれば、地方の系列校に出ている教授たちに張り合いを持たせることが出来ると同時に、そうした機運を積極的に作ったわれわれに対する支持が強くなり、将来、われわれが動きやすくなるな」 (白い巨塔)
- (51) 「この価格をばんばん広告で打たれて、多くの客がその値段を認知するようになったら、うちとしては非常にやりになります。 (略)」 (夢を売る男)

3.1.3 難易を条件づける要因が恒常的に存在する場合

これまでに取り上げたのは、個別主体が主語となり、難易を条件づける要因が具体的な時間の中に存在する場合であった。ここでは、一般主体が主語となり（明示されない場合もある）、難易を条件づける要因が恒常的に存在する場合を取り上げる。この場合、難易のともなう動作には時間的限定性がなくなり、テンスの対立もなくなる。

次にあげるのは、恒常的な要因に条件づけられた、動作の実行の困難さを表す例である。「しなければ」「しないと」のような否定のつきそい文をとこなう場合は、動作の円滑な実行のための条件が欠如することで、動作の実行が困難になることを表す。

- (52) しかし、多くの人は、やはりそれぞれにとって心地よい環境でなければ、仕事や勉強をしにくいのではないでしょうか。（知的生活・楽しみのヒント）
- (53) ウォークがまっすぐでないと、男性はリードしにくく、女性もリズムにのれません。（早わかりダンスの基本）

次の例は、動作主体が不特定であるため、主語が明示されていない例である。動作主体以外のテーマが存在するが、主語は「選手」や「医師」であろう⁷。

- (54) 相上段の場合、竹刀が触れ合わないので間合いをつかみにくい。しっかりと、慎重に間を詰める必要がある。しかし機会が生じれば、相手よりも旺盛な気迫と積極性を持って攻撃せねばならない。加賀は攻めた。（卒業）
- (55) 特養などの施設の場合は、たとえ睡眠薬を強くしても転倒リスクはぐっと下がる。二十四時間の見守りが可能だからだ。一方、在宅では監視し続けるのが難しいため、足元のふらつく強い薬は処方しにくい。（いのちの十字路）

次にあげるのは、恒常的な要因に条件づけられた、動作の実行の容易さを表す例である。

- (56) それに、初心者は満天の空よりも目立つ星しか見えない都会の方が星座を見つけやすい。（朝日新聞 週刊 2020.12.21）
- (57) 発表会でも、固有名詞が出てくれば質問がしやすい。その固有名詞について、少し詳しく説明してほしい、という問いがなされる。（喜嶋先生の静かな世界）

⁷ なお、例55は、外的条件だけではなく、対象（薬）の特性も難易を条件づける要因となっている。

こうした例では、どういうときに動作の実行が容易／困難になるかという一般的な法則を捉えており、時間的限定性がない。よって、テンスの分化がなく、基本的に非過去形をとる。また、「しやすい」と「しにくい」で用例数の偏りは特に見られない。

3.1.4 「～とは考えにくい」について

これまでに見てきた用例は、動作の実行の難易を表すものであった。ところが、「考える」のような思考動詞の場合、「考えにくい」は思考活動自体が困難であることを表さず、引用文の内容の成立に対する話し手の否定的な態度を表す点で特殊な性格を持つと言える。

- (58) 本橋優奈が最後に目撃された場所を中心に、遺体の焼却が可能なところを当てることになった。まさか空き地で焚き火のふりをして焼いたとは考えにくいから、焼却炉が使われた可能性が高い。近辺の焼却炉を片っ端から調べる一方、改めて部品工場の従業員について、身近なところに焼却炉がないかどうかを確認することになった。(沈黙のパレード)
- (59) 通帳や印鑑などの貴重品は残されているが、だからこそストーカーや物取りの犯行とも考えにくい。部屋は誰かに荒らされた様子もなく整然としていた。(神様の定食屋)
- (60) 「本橋優奈ちゃん事件の遺族たちのことをおっしゃっているわけですね」
「可能性はあるだろう？」
「それはそうですが、考えにくいと思います」
「なぜだ？」
「単純です。時間が経ちすぎているからです。(略)」(沈黙のパレード)

このタイプの難易文は、引用文の内容に対して、話し手が「その内容が成立する可能性は極めて低い」という態度を表明するものである。例えば、例58は、「空き地で焚き火のふりをして焼いた」という可能性は極めて低い」という意味を表す。

これらの例で、話し手は何らかの根拠によって判断を行っている。常識的に考えると、引用文の内容が成立する可能性は極めて低いものの、ゼロであるとは言えない。可能性がゼロであると確信しているときは「～とは考えられない」と言う。

なお、こうした「考えにくい」と対立する「考えやすい」はない。「この問題は補助線を引くと考えやすい」のように、「考えやすい」は文字通り「考えることが容易である」の意味になる。

3.2 動作の準備や方法が実行の難易を条件づける場合

動作の実行を易しくするために、我々は適切な準備や方法を考える。ここでは、動作の準備や方法が実行の難易を条件づけている例を、具体的な場合と一般的な場合に分けて取り上げる。

3.2.1 具体的な動作の難易を条件づける準備や方法

動作の実行を容易にするために、あらかじめ準備をしておくことがしばしばある。次は、動作の準備が難易を条件づけている例である。

- (61) 「僕の、体の動きについては知ってるよね？」

「はい、紹介状である程度のことまでは。ただ、もしよろしければ、先にお体を簡単に拝見してもよろしいでしょうか？ その方が質問にもお答えしやすいと思いますので」（いのちの停車場）

- (62) 亨はそこで助手席から立ち上がると、運転席との間を歩くようにして、後部座席に移動した。
玉田憲吾の隣に並び、腰を下ろすと、「このほうが喋りやすいや。内緒の話を」と言った。（ガソリン生活）

次は、動作の方法が難易を条件づけている例である。

- (63) 「明視スクリーンのほうに映しましょうか？」と片岡はいった。「そのほうが見やすいでしょう」（日本沈没）

- (64) もちろん腰が低いからといって、彼らが私たちを対等に見ているとは限らない。その方が仕事をしやすいと思っているだけのこともかもしれないし、とりあえずその場をつつがなくこなそうとしているだけかもしれない。（店長がバカすぎて）

3.2.2 一般的な動作の難易を条件づける準備や方法

ある動作の実行を容易にするためには、このような準備をしたり、こうした方法を選択したりすればよいということが、話し手の知識の中にあるといった場合がある。この場合、動作主体は一般化している。

- (65) 「春の星座を探す時は、まず北斗七星からの春の大曲線が目印にすると見つけやすい。この曲線のアークトゥルスとスピカ、その下の方にあるしし座のデネボラを結ぶとできるのが春の大三角形です。周りの星座を探す時も見つけやすくなるけん、これ、ぜひ覚えて」（この夏の星を見る）

- (66) 「やすりをかける時は、やすりの方を動かすんじゃなくて、こうやって、やすりを机の上に固定して、筒の方を動かした方がやりやすいよ」（この夏の星を見る）

次の例は、それを選択すれば動作の実行が困難になるといった準備や方法、あるいは、それが欠

けていれば動作の実行が困難になるような準備や方法を一般的に提示している。

- (67) 「貧しい者はお互いが頼りですからね、自分の欲を張っては生きにくい、というわけだろうね」
(雨あがる)
- (68) 「それが慣れによるものなのか、橘さん自身の変化なのかはわかりませんが、でもどちらにせよ、安全とか安心を、この場で感じてくれているってことですよね？そういったものが保証されていなければ、自己開示はしにくいものです。(略)」(ラブカは静かに弓を持つ)

動作の準備や方法が動作の難易を条件づける場合、多くは「しやすい」の例であり、「しにくい」の例は非常に少ない。

4. 意志的な動作の「難易」を表さない文について

4.1 物の無意志的な運動の進行難易

これまで人間の意志的な動作の「難易」を表す難易文の意味用法について述べてきた。動作の主体を主語とする難易文には、このような意味を表す例が最も多い。これは、動作動詞には意志的な動作を表すものが多いからであろう。だが、数は少ないものの、物の無意志的な運動を差し示す動詞が述語になる場合もある。

- (69) 真備町を南北に流れる本流の高梁（たかはし）川と、東西に流れる支流の小田川との合流点付近は、湾曲していて水が流れにくい。(朝日新聞 夕刊 2021.9.24)
- (70) 予定地周辺の地質は古い花こう岩で地下水が流れやすく、地下水とともに有害物質がダムに流れ込むおそれがあると指摘。(朝日新聞 朝刊 2000.9.14)
- (71) 前方前頭位だと先進部の径が大きくなるため、分娩が進みにくい。(あしたの名医)

これらの例は、いずれも、運動が成立するか否かということの難易ではなく、運動の進行がスムーズか否かということに注目している。

4.2 人の無意志的な動作の傾向

また、物だけではなく、次のように、人間の無意志的な思考や反応を表す動詞が述語になる場合もある。まず、集団の文化的・社会的背景に根差した「思考・態度の傾向」を捉えた例を見てみよう。

- (72) 純朴な田舎のインド人は奇跡を信じやすい。だが、サイババに批判的なグループもある。(朝

日新聞 週刊 1996.9.16)

- (73) モンゴル人は妖怪を信じやすいが、トゴンは全く信じない。(朝日新聞 朝刊 1996.3.8)

これらは、特定の国や地域の人々がある考え方や信念を持ちやすいという傾向を表している。内的な特性ではあるが、その背景には、伝統・教育・生活環境といった外的な社会的要因が深く関与しており、単純に内的要因のみに起因するとは言い難い。また、これらの傾向は、話し手（または書き手）の主観的な観察や印象に基づく場合も少なく、認識の偏りが生じる可能性がある点に注意すべきである。

一般主体だけではなく、次の例のように、個人の態度・感情的な傾向を表す例もある。これらの傾向は、主体の信念や性格といった内的特性に基づくと考えられる。

- (74) 「世間の多くの人にとって江角マキコ = 『ショムニ』の強い女と思っていますが、本質はそうじゃないんです。人を信じやすい。お金持ちで色黒のちょい悪オヤジのような男性が目の前に現れたら、普通は警戒するけど、彼女は信じてしまうんです…」(朝日新聞 朝刊 2017.2.17)

- (75) 及川は三十一期の七十六番で、温厚な漢学者である、妥協しやすい。永野の不同意で、及川の決意はしばみ、海軍はネコの首に鈴をつけられないネズミ集団のようになった。(帝国海軍軍令部総長の失敗)

次に、一般主体の無意識的な行動の傾向を表す用例を取り上げる。

- (76) 人はやすきに流れるものである。安心してしまつとついつい楽なほうへ楽なほうへとなびきやすい。(田舎社長の成功経営術)

- (77) 「人間の心理ってのは、そういうものらしいぞ。それに、中間管理職と呼ばれる会社員は、暴走しやすい。ボスから受けるストレスを、自分より弱い人間にぶつけたくなるからな。(略)」(ガソリン生活)

これらの用例では、習慣やストレス、トラウマが要因となり、無意識のうちにある行動が起きやすいことを表している。人間に共通する特性や社会的立場、過去の経験など、内的・外的な複数の要因が関係していると考えられる。

次は、個別主体の場合の例を取り上げる。

- (78) 160センチの捕手清水が42人のチームをまとめる。最大の特徴は「泣きやすい」。練習試合で

も涙を流し、(略)。(朝日新聞 朝刊 2001.7.7)

(79) 鳥居さんは2002年に起こした脳出血の後遺症で左半身がまひし、高次脳機能障害で物事を忘れやすい。(朝日新聞 朝刊 2017.2.17)

(80) だいたい私は、えずきやすい。うがいをしていても「おえっ」となるときがある。(お友だちからお願いします)

これらの用例は、無意識的な反応や行動が起こりやすいという傾向を表している。これらは、性格や病気、体質などの比較的安定した内的特性に基づいている。

4.3 人の意志的な動作の傾向

先行研究でも指摘されているように、難易文が「傾向」の意味を表すのは、基本的には無意志動詞の場合であるが、次のように、あるクラスに属する人に共通して見られる行動パターンによってその人を一般的に特徴づけるような場合には、意志動詞でも「傾向」を表す場合がある。

(81) このこともまた、実利的プラグマティズムに通じる。絶対的正義感を持たない人間は、自分の利益になることを支持しやすい。(知価革命)

(82) 男性は価格の比較をすることが多いですが、テレビをよく見ているシニア層は、見ているものを買いやすい。(略)」(朝日新聞 週刊 2019.9.20)

(83) 温風が吹き出すファン型と、中心部に真っ赤な円筒が見えるふく射型があるが、県内の人や高齢者は「火が見える方が暖かそう」とふく射型を選びやすい。(朝日新聞 朝刊 2000.10.19)

これらの例は、人間の行動傾向とその背景的要因との間に見られる規則性や関連性を捉えている。この点において、意志的な行動傾向も、前述の無意志的な行動傾向と共通する性質を有すると言える。

5. おわりに

本稿では、動作の主体を主語にする難易文の意味的・文法的な特徴を記述してきた。では、このタイプの難易文は、難易文全体の中でどのような位置を占めているのだろうか。最後に、動作の対象を主語にする難易文と変化の主体を主語とする難易文の類似点と相違点についてごく簡単に述べておきたい。

本稿では、動作の主体を主語とする難易文には、動作の遂行の困難さ・容易さを直接に表すもの(例84)と、主体の特性や恒常的な法則性を表すもの(例85、86)があることを確認した。

- (84) まだ胃の中に食べ物がたくさん残っていて、(私は) 息がしにくい。
(85) 彼は脳性まひで、生まれつき両足と左手が動かしにくい。
(86) 相上段の場合、(選手は) 竹刀が触れ合わないので間合いをつかみにくい。

動作主体を主語とする難易文では、主語が省略される場合がある。たとえば、一人称の場合や、動作主体が不特定であるために明示されない場合である。しかし、いずれの場合でも、主語は常に動作主体であり、省略されていても復元可能である。これに対して、動作の対象を主語とする難易文では、主語は動作の対象であり、動作主体は基本的に消去される (例87、88)。この違いによって、意味構造の方向に大きな違いが生じる。

- (87) 小骨の多い魚は食べにくい。
(88) このパンは食べやすい。

まず、動作の対象を主語とする難易文では、主体が消去されることによって、主体の実行の難易を述べる文から対象の特性を述べる文へと意味構造が変化する。このタイプの文は、対象の性質を中心に述べる点で、形容詞文に接近しており、他動詞の難易文では数多く用いられる中心的な用法である。

また、動作動詞の場合、難易文は基本的に人間の意志的な行為の難易を表す。これは、難易文に用いられる動作動詞の多くが意志的動詞であることと関連している。しかし、動詞によって表される事象が人間の意志でコントロールできない変化である場合、難易文は動作の困難さや容易さを述べるのではなく、状態や事象の発生傾向を表すようになる。

- (89) 鉄は錆びにくい。
(90) 私は疲れやすい。

このように、変化の主体を主語とする難易文は、基本的に「傾向」を意味する点で、動作の主体を主語とする難易文とは意味的に対立している。動作主体を主語とする難易文が人間の意志的行為における難易を述べるのに対し、変化主体を主語とする難易文は無意志的变化の傾向性を表すのである。

なお、動作の主体を主語とする難易文は用例数が限られており、対象主語タイプのように中心的な用法を形成しているとは言い難い。

参考文献

- 奥田靖雄 (1986) 「現実・可能・必然 (上)」『ことばの科学』 1、pp.181-212、むぎ書房
- 井上次夫 (1997) 「容易性・傾向を表す「～やすい」の分析」『Studium』 24、pp.98-113、大阪外国語大学大学院院生協議会
- 井上和子 (2005) 「日本語の難易文をめぐる」鎌田修ほか編『言語教育の新展開 牧野成一教授古稀記念論集』 pp.77-92、ひつじ書房
- 井島正博 (1991) 「可能文の多層的分析」『日本語のヴォイスと多動性』 pp.149-190、くろしお出版
- 大江元貴 (2014) 「日本語と中国語の可能・難易表現に関する認知論的・語用論的研究」博士学位論文 (筑波大学)
- 工藤真由美 (2014) 『現代日本語のムード・テンス・アスペクト論』 ひつじ書房
- 小矢野哲夫 (1980) 「現代日本語可能表現の意味と用法Ⅱ」『大阪外国語大学学報・言語編』 48、pp.19-33
- 孫慧鑫 (2023) 「日本語の難易文のヴォイス的側面」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』 55、pp.141-150
- 孫慧鑫 (2024) 「動作の対象を主語とする難易文について」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』 58、pp. 53-70
- 渡邊績央 (2007) 「日本語の難易文」『東京大学言語学論集』 26、pp.185-228
- Inoue, Kazuko. (1978) " 'Tough' sentences in Japanese," Problems in Japanese syntax and semantics, ed. by Jone Hinds and Irwin Howard pp.122-154
- Inoue, Kazuko. (2004) Japanese 'tough' Sentences Revisited, in Scientific approaches to language 3 (this volume), Kanda University of International Studies pp.75-111